日本とカナダの共通点

以上のように、日本とカナダの違いは非常に大きいように思われる。しかし、共通点もまた多いのである。重要なことは、違うところと共通しているところをはっきりと認識した上で、相互に補完しあい、協力していくことであろう。

共通点の第一は、美しい自然である。今や日本の自然は、山紫水明とはいい難いかもしれない。しかし、それでもなお、日本の自然は美しいし、豊かでさえあるといってよいのではなかろうか。日本の国土の七〇パーセントは森林である。美しい湖沼も河川も少なくない。規模の点で、カナダとは比べられないとしても、質の点では比肩しうる美しさを持っているのである。残念なことは、この美しい自然が、工業化や都市化によって、損なわれつつあるということである。日本においても、カナダにおいてもである。

社会の多様性ということを、共通点の第二としてあげることができよう。カナダは、いうまでもなく多様な社会である。八十を超える民族、七十もある言語、まさにカナダは「モザイク社会」である。しかも、そうした多様な存在、多様な文化の共存を積極的に認めていこうというのが、カナダの姿勢のようである。

それに対し、日本はむしろ、均質な社会といわれている。確かに、日本は長い歴史をもち、人種的にも限定されている。言語もひとつといってよい。均質と考えられないわけではない。だが、そうしたことの背景にある質的な多様性を見失なってはならない。日本は世界の文化のたまり場とさえいわれるように、そこには、多様な文化が内包されているのである。宗教ひとつとっても、仏教とキリスト教が（しかも、そのそれぞれの宗派が）平和に共存しているのである。日本の社会もまた、このように多様な存在を許容する社会であるといってよいであろう。こうした多様性の底にある寛容性こそは、これからの世界にあって、最も重要なことではないかと思われる。

第三の共通点は、中堅国家であるということである。カナダも日本も、決して大国ではない。日本は、経済大国といわれることもある。確かにGNPでみると大国を思わせる。しかし、そのGNPを支える工業資源は、ほとんど輸入に依存しているのである。つまり、自分だけでは、GNPの半分も生み出せないのである。さらに、経済を支える政治の面では決して大国とはいい難い。真の意味で、国際政治上、どのくらいのリーダーシップがとれるかは、非常に疑問である。このように考えると、日本は中堅国家と自己規定するのが適切であると思われる。

日本もカナダも、工業先進国サミットのメンバーである。しかし、先進国意識よりもむしろ中堅国家意識をもって、サミットにも参加するべきであろう。大国の論理に対し、もうひとつの世界（中堅国家や開発途上国）を背景に、カウンターパワーとなることによって、世界のバランスをとることが、日本やカナダの役割ではなかろうか。

また、両国とも、平和を指向することで共通している。いや、この点は、共通という以上の深い係わりをもっていることを、とくに日本は認識しておくことが必要であろう。

日本は、憲法で、戦争放棄と平和主義を打ち出したが、その憲法の確立に当たり、当時、極東委員会のメンバーであったカナダ政府の果たした役割は、非常に大きなものであった。さらに、講和により、日本が国際社会に復帰した後も、カナダ政府は日本の平和外交を積極的に支援してくれたといわれている。カナダ政府のためにも、我々は、平和憲法を十分かみしめていかねばならない。

第四の共通点として、両国とも独立戦争を経験していないことをあげておきたい。とくに、カナダにおいては、近代ナショナリズムの起点ともいうべき、市民革命も独立戦争もなく、上からの（つまり英国による）先取り的な指導により、創造された国家といってもよいであろう。一方、日本もまた、明治維新という運動があったくらいである。明治維新も、見方によっては、上からの指導による国家づくりといってよい。

独立戦争の不在は、ナショナル・アイデンティティの希薄さにつながるという見方があるが、確かに、日本もカナダも、たとえば、ヨーロッパ諸国にみるような、強固な、自覚的アイデンティティに乏しいようである。

しかし、同時に、このことは、先に述べた寛容性と深く係わっている。ナショナルな意識をこえた、コスモポリタンへの道が、そこには開けているといってよい。

経済の貿易依存度が高いということも、両国の共通点である。もっとも、日本は、原材料輸入・完成品輸出型であるのに対し、カナダは、原材料輸出・完成品輸入型であるという風に、その構造は正反対である。しかし、貿易依存度が高いということは、経済が、ひいては国家そのものが、広く世界に向けて開いていなければならないということである。

以上、いくつかの共通点を述べてきたが、これらはすべて深く関係しあっていることを強調しておきたい。中堅国家、平和、寛容さ、開かれた経済、希薄なナショナリズムは、いわばワンセットのものであり、さらに豊かで、美しい自然と深く関わっていることを理解しておく必要がある。

日本とカナダの、このような共通点と相違点に立脚して、はじめて、意味のある日本とカナダの関係が創造されるといってよい。その意味で、もっともっと両国は相互に理解を深めていくことが必要である。

真の相互理解へ

昨年、約十三万人の日本人がカナダを訪れたという。そのほとんどは観光であろう。カナダも、積極的に日本からの観光客誘致に努めているようである。今年はさらに、多くの日本人がカナダを訪問するであろう。確かにそれは、日本人のカナダ理解を深めることに若干の貢献は